

思いやりのある子が育つための援助の工夫
～自然やまわりの人々とのかかわりをとおして～

目 次

I	研究テーマ設定理由	1
II	園の教育目標と研究テーマとの関連	2
III	調査研究	3
	家庭における幼児の生活の実態調査と考察	3
IV	思いやる心を育てる	5
1.	思いやりの心	5
2.	思いやりのある子とは	5
3.	園生活の充実を通して思いやりの心を育てる	6
(1)	充実した園生活を送るためには	6
(2)	家庭・地域との連携	6
4.	幼児理解	8
5.	教師の援助	8
6.	友達とかかわる力について	9
7.	園及び周辺環境	10
V	保育実践	11
1.	実践事例 保育の展開	11
2.	実践事例 他児とかかわろうとしなかったY男の変容	15
3.	実践事例 全園児とかかわりの中から(おやつ場で)	17
4.	実践事例 おばあさんの来園	19
5.	実践事例 馬のステンキーと遊ぼう	20
VI	研究の成果と今後の課題	22
	<引用・参考文献>	

浦添市立仲西幼稚園教諭

仲 里 紀美子

思いやりのある子が育つための援助の工夫

～自然やまわりの人々とのかかわりをとおして～

浦添市立仲西幼稚園教諭 仲 里 紀美子

I テーマ設定の理由

階段にダンゴムシがいるのを見つけ「階段にダンゴムシがいると踏みつぶされてしまうよ。だから土のところに引っ越しさせたよ。」とか、いろいろな虫やバッタをつかまえて「遊んだらあとで逃がしてあげるよ。」の子ども達の声。小動物の死に直面した時に、「水がなかったから?」「餌がなかったから?」、「病気だったんじゃない!」等、子ども達はいろいろと考え、悲しい気持ちを表し野の花を添える子がいる。長期欠席していた子への園からの手紙を率先して配達してくれる子、怪我をした時、消毒液で手当をしてくれる子等、園生活の中で子ども達のやさしさがよく見える。

その反面、飼育動物の世話や栽培物への水やり等、クラスのみんでやっていると、途中で自分の遊びたい活動へそっと抜けたりする子、遊びの中でのグループ意識が強く仲間に入れてくれなかったり、自己主張ばかりして相手の意見を聞こうとしない子、友だちとうまくかかわって遊べない子等が見られる。

何故だろうか、地域や家庭をとりまく環境を見てみると、動物の飼育をしたくても、周りの都合で制限されることがあったり、自然とのふれ合いの場が少なかったりしているのではないだろうか。また隣近所との付き合いの希薄、少子化傾向による兄弟・姉妹・友だちとのかかわり合いが少ないこと等が考えられるのではないだろうか。

これまでの私自身の保育を振り返ってみると、性急に指示や教え込む傾向にあったのではないだろうか。そのために子どもの言葉にじっくり耳を傾けたり、一人一人の良さを見つけて、場に応じた適切な言葉かけをしていなかったのではないだろうか等の反省がある。そこで子ども達に身近な自然とかかわり、友だちや教師、地域の人々とのふれあいを通すことによって、やさしさや思いやりの心が芽ばえていくのではないかと思う。

園生活において

- ・一人一人の幼児の活動の理解をする。
- ・友だちや周りの人たちとのかかわりをもつ場の設定と工夫をする。
- ・自然とのふれあいや、飼育動物、栽培物へのかかわり合いを深める環境の工夫をする。

以上のことを研究することにより、人とかかわりや自然とのふれあい、体験を通して愛情や信頼感、思いやり等が育っていくのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 園の教育目標と研究テーマとの関連

たくましい子

元気に遊べる子	心の豊かな子	よく聞き、よく考える子
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 自分から進んで遊べる ◦ 戸外で活発に遊べる ◦ 安全に対処できる ◦ 最後まで頑張る 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 思いやりがある ◦ 仲良く遊べる ◦ 身近な物を大切にする ◦ 美しい物に感動する 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 人の意見が聞ける ◦ 善悪の判断ができる ◦ 自分から試したり工夫したりできる ◦ 自分の気持ちを言葉で表現する

重点目標

- 基本的な生活習慣を身につけさせ、健康と安全教育を図る。
- 園と家庭及び地域社会との連携を密にし、相互理解と協力を促進する。
- 園と小学校との連携を深める。
- 身近にある自然環境を通して、豊かな心の子を育てる。

指導方針

- 一人一人の子どもをよく理解し、自ら進んで行動できるようにする。
- 身近な動植物の飼育、栽培を通して、感動できる子を育てる。
- 先生や友達との遊びや活動を通して、人とかかわる力を育てる。
- 戸外遊びを通して、元気いっぱい遊べる子を育てる。

研究テーマ

思いやりのある子が育つための援助の工夫
 ～自然やまわりの人々とのかかわりをとおして～

研究仮説

- 周りのいろいろな人や物との触れ合いを体験し、人や自然に対する愛情や親しみを持つことにより、思いやりや、やさしさが育つであろう。

研究内容

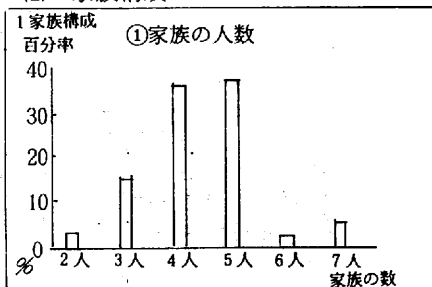
- 思いやる心とは。
- 幼児の生活の実態調査。
- 友だちや周りの人たちとのかかわりを図る。
- 自然とのふれ合いや、飼育動物、栽培物とのかかわり方の工夫。
- 保育実践。

Ⅲ 調査研究

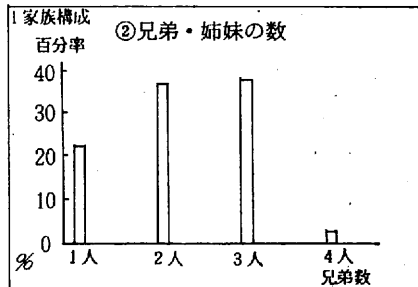
実態調査

- ① 調査目的……家庭における幼児の生活の様子と園に望むことについて把握するために保護者に依頼してアンケート調査を実施した。
- ② 調査対象……園児の保護者89名中60名回収
- ③ 調査月日……5月1日から5月10日
- ④ 調査方法……質問紙法

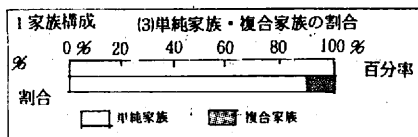
(1) 家族構成



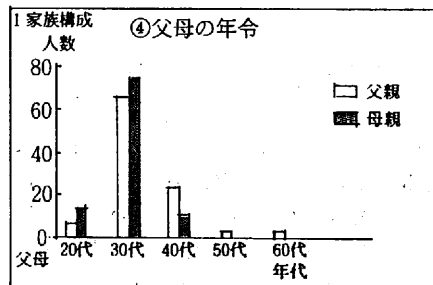
◦ 家族の人数を見てみると4人が36.6%、5人が38.3%、と多い。2人ないし3人家族は18.3%であるがこの中には単身家庭が含まれている



◦ 兄弟、姉妹の数においては、2人が36.6%、3人が38.3%が最も多く一人っ子が21.6%とかなり少子化傾向もみられる。

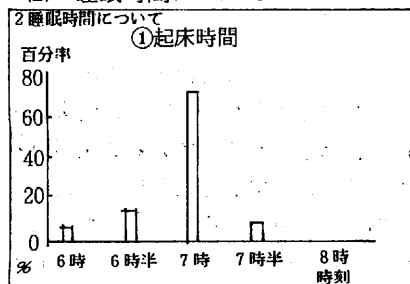


◦ 同居している家族は祖父叔母等で全体の10%にすぎない。核家族がほとんどである。

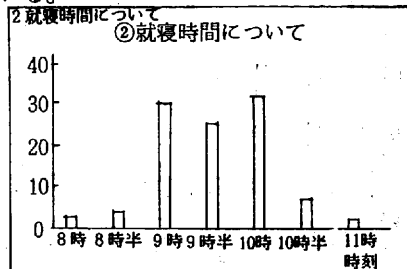


◦ 父母の年齢をみると30代が父親66.6%母親76.2%で多い。20代では父親5.5%母親11.8%となっており20代前半の若い父親、母親もいる。

(2) 睡眠時間について



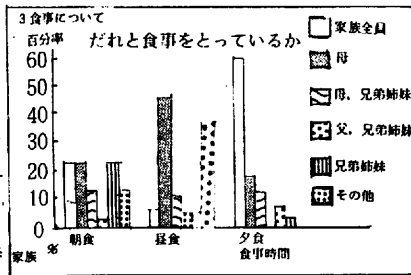
◦ 幼児の睡眠時間は子どもの健康と発達にとって不可欠のものであり、それだけに正しい睡眠の習慣を身につけることは大切である。起床時間をみると7時頃に起きる子が73.3%で最も多い。7時半頃起きる子が8.3%でこれは三年前(28%)の調査と比べると少なくなっているのが良い傾向が伺える。



◦ 就寝時間についてみると、10時以降の子が39.8%となっており、十分な睡眠をとるには就寝時刻が遅いと思われる。規則正しく生活している子は朝の目覚めも良く食欲もあり、活動も意欲的である。

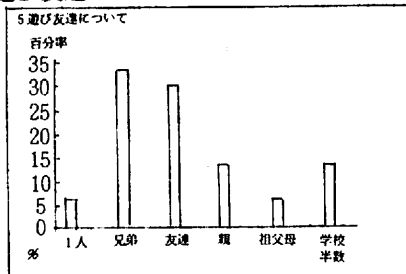
(3) 食事について

- 家族全員あるいは母親と朝食をとると答えた人はそれぞれ23%で、兄弟姉妹でとると答えた人も23%である。これは仕事の都合上子どもの食事時間に合わせることで、難しいとだめだと思われる。



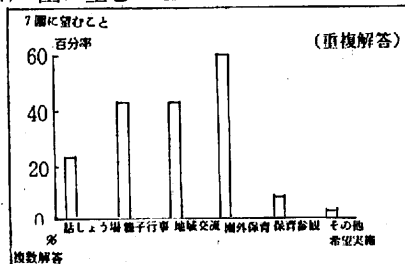
- 昼食は母親と一緒にとる子が半数以上おり、その他では学童でとる子が18%いる。
- 夕食は、家族全員そろってが60%おり、父親と一緒にとれないのが40%の現状である。夕食時に家族そろってということは難しいようだ。父親の帰宅が遅いことや、中には母親の帰宅も遅い場合もある。兄弟姉妹だけで食事をとる人は7%おり憂慮すべきことである。

(5) 遊び友達について



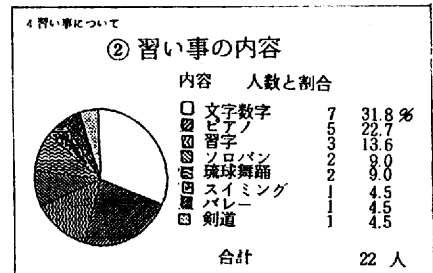
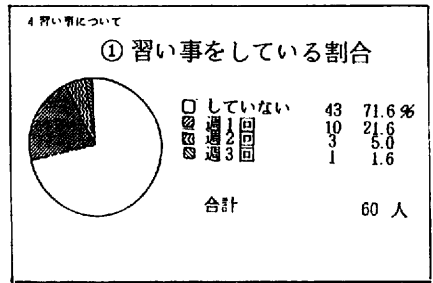
- 兄弟と遊ぶ子は33%で友だちと遊ぶ子は30%である。1人で遊ぶ子は6%親を相手に遊ぶ子は13%と友だちと遊ぶ機会が少ない子がいる。遊びともだちについては家庭や地域社会の環境が大きくかわっているのではないだろうか。

(7) 園に望むこと



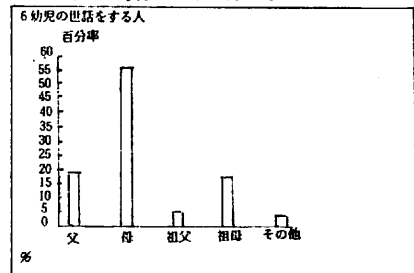
- 園外保育60%で最も高く親子のふれあい行事43.3%、地域の施設や人々との交流43.3%も望む声が多い、子育てについて話し合う場23.3%、保育参観8%で望む声は少ない。これらのことから、保護者が望むことは、園の周りにある公園で自然とのふれあいをしてほしいことや、遊具や広場で思いっきり体を動かして遊んで欲しいとの願いがあると思われる。

(4) 習い事について



- 何らかの習い事をしている子が28%おり、週1回が13%週2回が5%となっている。内容を見ると文字や数字に関する塾へ行っている子が32%とかなり多く、ピアノは23%ととなっている。友達といっばい遊びたいと願っている幼児の大事な遊びの時間を割いて週2、3回と習い事をしている子もいる。

(6) 幼児の世話をする人



- 幼児の世話をするのは母親が56%と最も高く、父親19%、祖母18%となっている。核家族が多い中で祖母に世話をもらっている幼児がいることは、降園後近くに住んでいる祖父母宅へ行っているからであろう。日々世話をしてくれている家族や周りの大人が心にゆとりをもって、やさしく幼児にかかわっていくことが大切なのではないだろうか。

実態調査のまとめ

幼児の生活や園に望むことを調査したことで、家庭での生活の様子や過ごし方、保護者の園へ望むことを知ることができた。幼児の生活の実態においては少子化傾向にありその中で、人のかかわりかたや就寝時間、遊び友だち等について問題点を見だし幼児にふさわしい生活ができるよう家庭との連携をとりたい。また園では、自然と触れ合う遊びや園外保育での体験など、場と環境の工夫をしていきたい。

Ⅳ 思いやる心を育てる

1 思いやりの心

思いやりの心とは、相手の立場になって考えられ、自分も大切にし人や物も大切にすることである。「思いやり」の心は親たちや家族、さらに保育者から「思いやり」を受けとることによって発達する。「思いやり」とは相手の立場に立って考え、相手の気持ちをくむ能力であるからその相手が子どもである時は、子どもの立場に立って考え、子どもの気持ちに共感することである。これを「共感性」と呼んでいる。自分がつらさを感じなければ相手のつらさもわからないし、つらさを乗り越えた自信がなければ、相手を思いやる心の余裕が生まれない。

幼児期の思いやり・共感、幼児を取り巻く他者との安定した人間関係が重要である。客観的な関係を理解させる働きかけと共に、子ども自身の中にある情動的な共感を暖かく見守り、育てる配慮が大切である。「思いやり」は一人一人の子どもの良さをみつけられる「思いやり」のある親や教師になっていくことが、子どもたちの「思いやり」を育てることになる。

2 思いやりのある子とは

具 体 的 な 内 容	
<ul style="list-style-type: none">・やさしい気持ちのある子・友だちに親切にできる子・人が困るようなことはしない子・相手の立場を思いやれる子・友だちの事にも気を配れる子・誰とでも仲よく遊べる子・人の話が聞ける子	<ul style="list-style-type: none">・善悪の判断ができる子・自分の感情を素直に表現できる子・草花や動物を大事にする子・花や生き物を喜んで世話のできる子・美しいものに気づき、感動する子
期待する具体的な幼児の姿	
<ul style="list-style-type: none">○ 友だちと仲良く遊び自分の思ったことが言え相手の考えや気持ちを受け入れることができる。○ 友だちや周りの人の喜びやいたみを自分のこととして感じ、素直に表現できる。○ 困っている友だちに手をさしのべたり、わからないことを教えてあげたりする。○ 動植物に対し、愛護の気持ちをもって世話をすることができる。	

3 園生活の充実を通して思いやりの心を育てる

幼稚園教育の基本は「環境を通して行う教育」とされ、幼児は園生活を通してあらゆる環境（人的・物的）から刺激を受け、様々な体験を通して人間として生きるための基礎となる力を身につけ、自己を形成していく場であるといわれる。

(1) 充実した園生活を送るためには

<p>幼児期にふさわしい生活の展開</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 教師との信頼関係に支えられた生活が出来るようにする。 ◦ 興味や関心に基づいた直接的な体験が得られる生活が出来るようにする。 ◦ 友達と十分かかわって展開する生活が出来るようにする。
<p>遊びを通しての総合的な指導</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 幼児期のおそび 遊びを通して、達成感、挫折感、葛藤、充足感を味わいながら心身の調和のとれた発達をしていく。 ◦ 総合的な指導 遊びを通して幼児が発達する姿を様々な側面から捉え、幼稚園教育のねらいが総合的に達成されるようにする。
<p>一人一人の発達の特性に応じた指導</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 一人一人の幼児の発達の特性やその幼児らしい行動の仕方や考え方などを理解して、課題に応じた指導を行うようにする。

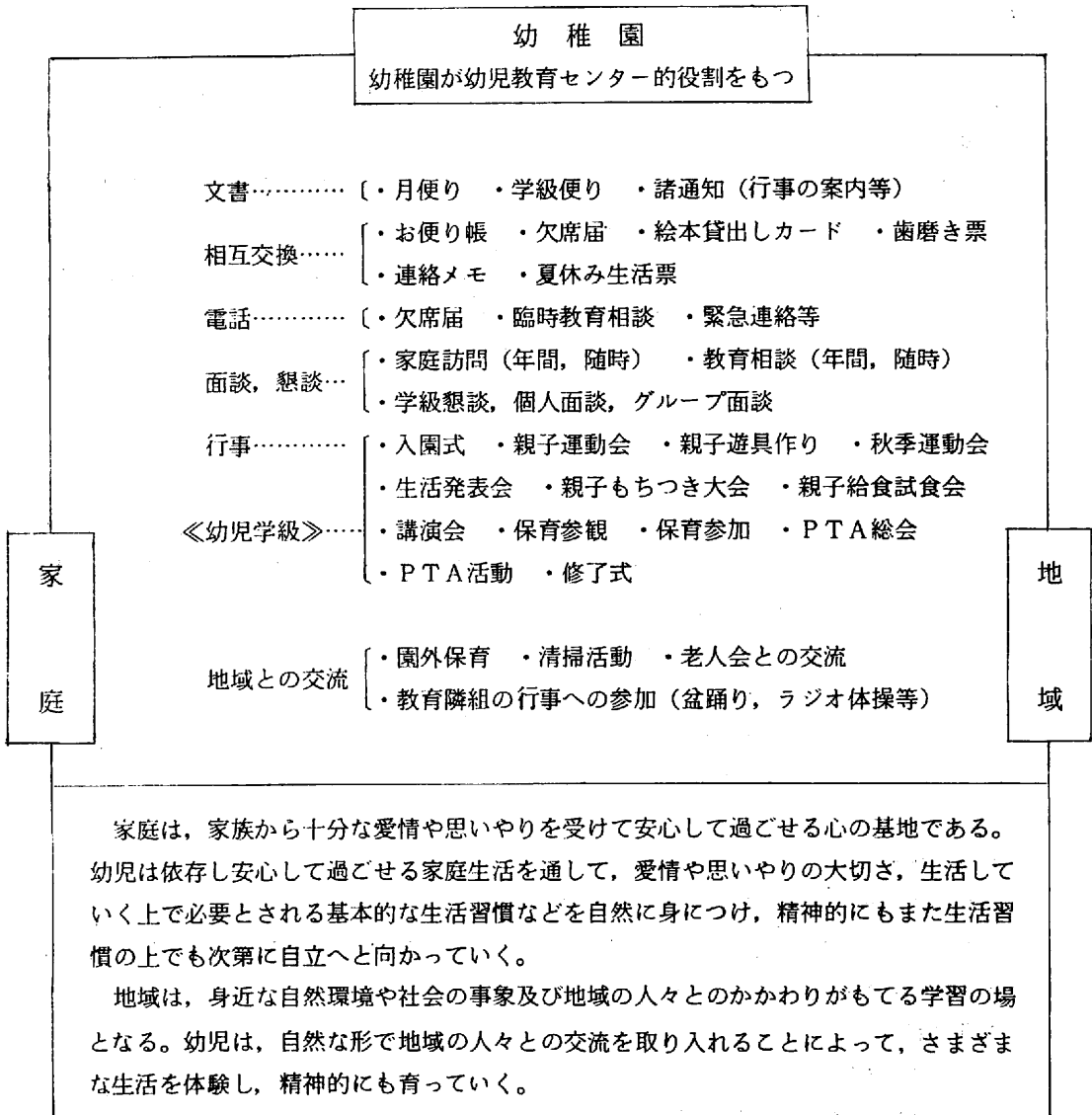
これらが基本としてあげられている。幼児が適切な環境の中で自ら活動に取り組み、身近な自然とかかわったり、友達や信頼してくれる教師、たっぷり遊べる時間、それらによって安定した園生活を送ることができると言えよう。そのように安定した中で、幼児は十分に力をだし、生きることができると考える。そこで幼児自らかわれる草花、野菜、小動物などを飼育・栽培するなかで、命のあるものにかかわっているということで、自分以外のものに対するいたわり・思いやりの心・美しいものを感じる心が育つ。また友達を求め自分が受け入れられると、安定して遊ぶことができるようになる。そしてトラブルが起きた時、自分や友達がどういう気持ちになるかという経験をすることによって友達の気持ちを汲もうとする心が芽生えてくる。また、友達と共感することで自分の力や存在を確認し、生き生きと遊べるのではないだろうか。

(2) 家庭・地域との連携

幼児の望ましい発達は、家庭や地域での生活体験と園生活での体験の相乗効果によって図られる。だから、家庭や地域を含めた幼児の生活全体を視野にいれた園教育が必要である。そこで園と家庭、地域の連携をとり、地域の文化にふれさせ、これからの独自の文化を創造し育てることが重要だと考える。

園と家庭、地域との連携内容

幼稚園は地域の幼児教育のセンター的な役割を果たすことを期待されている。大切なことは地域の子供たちが、いつでも集まって来ることができたり、近所のお年寄りが子供たちの様子を楽しみに見に来てくれたり、修了児が遊びに来たくなったり、地域で子育てをしている人たちからも頼りにされる幼稚園を目指すこと。地域の人々との信頼関係を大切に地域生活や文化に根ざした幼稚園であることが保育を充実させ、家庭との連携を進めるためにも必要である。



4 幼児理解

幼児を理解することが全ての保育の出発点である。目の前にいる一人一人の幼児と直接に触れ合いながら、幼児の行動や表情から、その幼児の良さや可能性、発達するすがた、心の動きなどを受け止め、理解しなければならない。発達感、保育感に立って幼児を理解し保育を展開するためには

- ① 良さを捉える目をもつ
- ② 活動の意味を理解する
- ③ 発達する姿を捉える
- ④ 集団と個の関係を捉える
- ⑤ 保育を見直す

以上の5つの点をふまえ幼児を理解しよりよい保育を作り出さなければならない。

幼児理解の方法

直感的理解……………その場で対応することが求められ、状況や流れを総合して個人の責任で判断し迫っていく。

省察的理解……………保育が終わった後、それを思い起こすことにより話し合や記録を通してみんなで判断し迫っていく。

幼児の姿を捉えるー気持ちを理解するー遊びを理解するー
生活を理解する

幼児を理解するとき、個々とクラス全体の姿をとらえなければならない。

個……………幼児との触れ合いをとおして一人一人の幼児の行動や表現からその幼児の良さや可能性、発達する姿、心の動きを受け止め理解すること。

クラス全体の姿を捉える視点

- ・生活の流れ
- ・遊びへの興味
- ・友達関係
- ・生活への取り組み方

5 教師の援助

幼児の主體的な営みを大切にしながら、幼児が望ましい方向に向かって自分の活動を展開していけるような適切な援助を行うことが大事である。環境を再構成することや、承認、助言などの直接的な援助を行うことである。

教師の役割

- ① 幼児を理解する
- ② 幼児との間に信頼関係を築く
- ③ 幼児の行っている活動の意味を考える
- ④ 幼児の内面的な意欲を高める

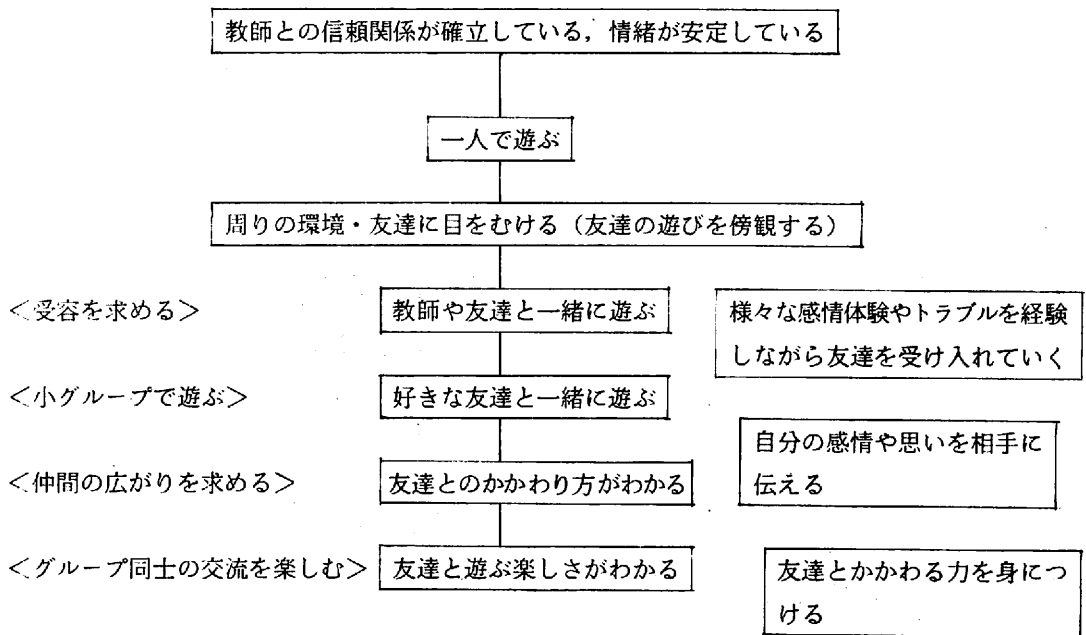
⑤ 幼児が自分で乗り越えるために援助する

教師の援助のあり方

- 一人一人を受容的に受けとめ安心感をもたせる。
- 子どもと一緒に活動するなかで共感的援助をする。
- 一人一人をよく理解し、個々にあった言葉のかけ方を工夫する。
- 子ども達の遊びを見守りながら必要な時に励ましたり、手伝ったりし、子どもの成長の方向性を示すような援助をする。
- 子どもの表面的な動きを記録するのではなく、内面的な動きを見落とさないように心がけて記録をし、次への手だてとする。

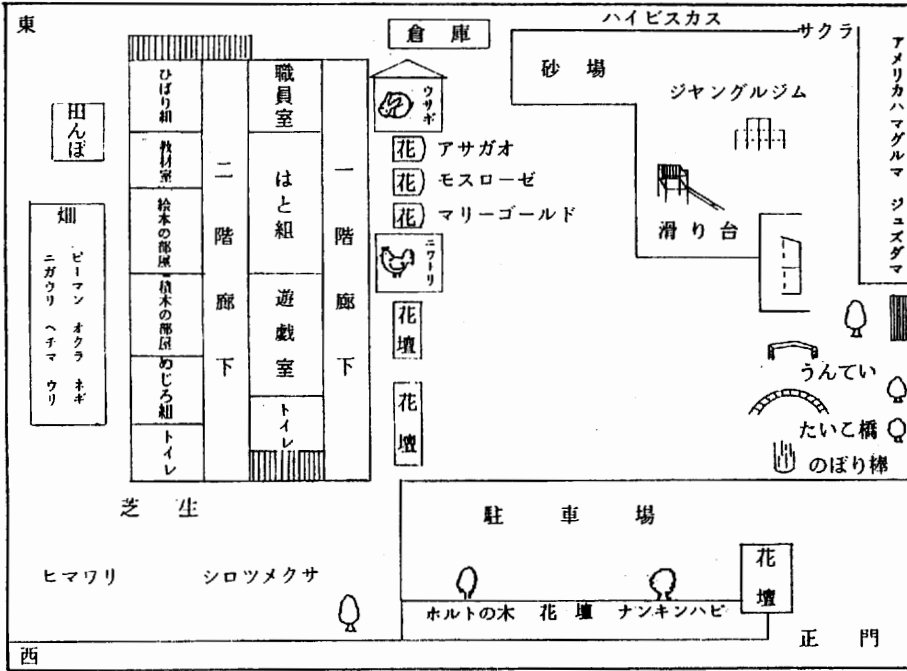
6 友達とかかわる力について

友達とかかわる力を、友達の存在に気づいたり、友達の行動に心を動かされたり、さまざまな体験をとおして、まわりの友達に親しみ、生活していく力であると捉えた。



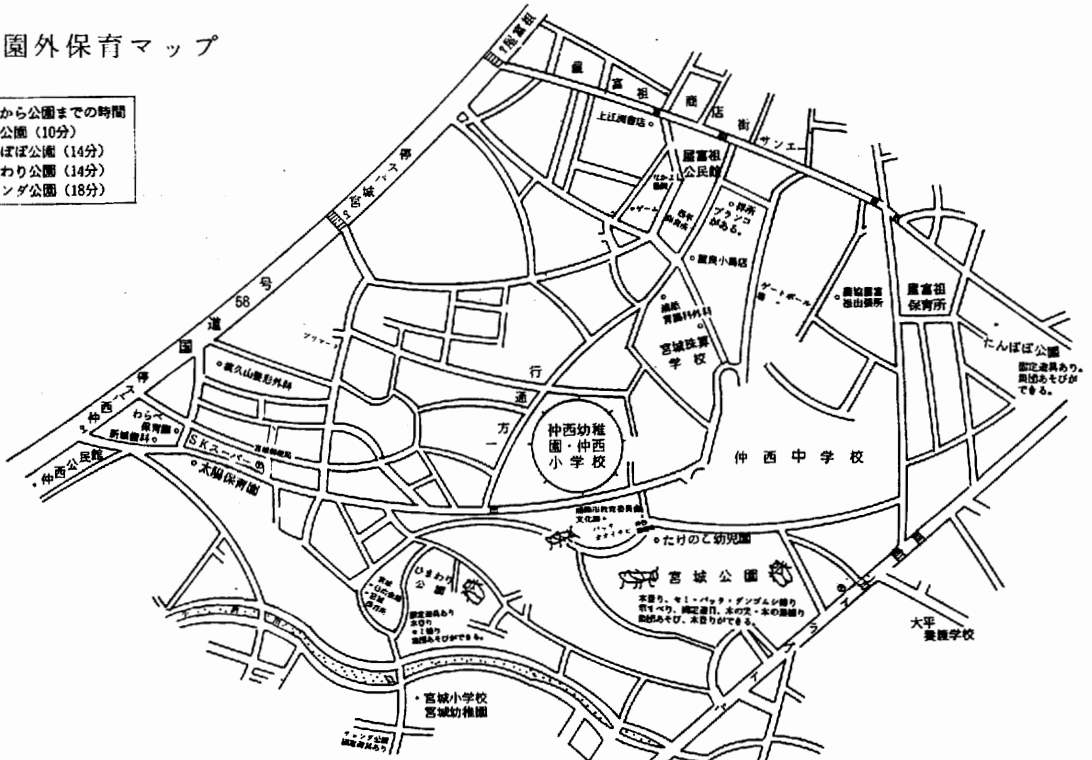
園庭・園舎見取図

7 園及び周辺環境



園外保育マップ

- 幼稚園から公園までの時間
- ・宮城公園 (10分)
 - ・たんぼ公園 (14分)
 - ・ひまわり公園 (14分)
 - ・チョンダ公園 (18分)



活動内容
 固定遊具で調べる・広場や斜面すべり
 虫捕りやセミ捕り・木登りや草花遊び
 などいろいろな体験ができる。

V 保育実践

保育指導案

6月16日(水)	本日のねらい	<ul style="list-style-type: none"> ◦飼育、栽培物の世話をとおしていたわりの気持ちをもち。 ◦友達と好きなあそびを工夫して楽しむ。 	<p style="text-align: center;">はと組25人、めじろ組32人、ひばり組31人、計88人 教師4人</p>
----------	--------	--	---

8:15

登園

登園時の活動

8:15

飼育動物の世話

10:00

友達と楽しく遊ぶ

12:00

帰りの会

隣園

チャボ、ウサギ

飼育動物とのかかわり

インコ、ザリガニ、カメ、グッピー

ボール遊び

サッカー

花いちもんめ

集団遊び

かごかごめ

固定遊具で遊ぶ

ジャンゲルジム、滑り台

憲てい、ぶらんこのり

のぼり棒

ピーマン、ネギ、ニガウリ、ヘチマ

栽培物への水やり

草花、アサガオ、ヒマワリ、モスローゼ

砂遊び

だんご作り、ケーキ作り

山や川、ダム作り

ダンゴムシと遊ぶ

草花で遊ぶ

シロツメクサ、アメリカハマグルマ

ムラサキカタバミ

◦教師も一緒にかわり合いながら飼育物や栽培物とのふれ合いを大事にしていたわりの気持ちを育てるように配慮する。

◦あそびの場で子供達一人一人に声をかけ遊びを見つけれない子や遊びに入っていない子へ配慮する。

◦外で解放感を味わい遊んでほしいので室内にいる子は外で遊ぶよう声をかけるが体調の悪い子やどうしても室内で遊びたい子は室内の遊びもできるようにする。

◦遊びの中で出てきた問題はなるべく自分達で解決していきけるよう援助する。

◦遊具や用具に危険のないように見守る。

◦園庭が狭いので遊びの場を自分達で工夫したり考えさせたりして援助する。

評価のポイント

☆飼育栽培物とのふれ合いで、やさしくいたわりの気持ちで接したり世話をすることができたか。

☆友達と関わって工夫して楽しく遊びが展開できたか。

◦あそびでいろいろ作って作った物や出来た喜びを共感してあげ満足感を味わわせる。

◦片づける場所の確認をしながら片づけることで援助する。

◦手足の汚れをきれいに落とすよう確かめる。

◦衣服がぬれたり汚れた場合は着替えるよう声をかける。

◦あそびに使っていい草花の使い分けができるように配慮する。

◦あそびだことについて子供と共に振り返り、楽しかった遊び、友達に伝えたいことなどを話し合えるような場をつくる。

室内での活動

- お家ごっこ
- 折りがみ
- 粘土あそび
- ブロックあそび
- 製作
- 絵かき

砂場セット、コロコロ、タライ、ビーチパラソル、イス、空容器、手押車、ボール

12:00

(活動の姿)

(サッカー)

2チームに分かれて遊び、「10対9だった。」と言う言葉が聞かれ得点にも気づいている。キックも上手にできていた。H男が中心になり分からない子に教えてあげる姿が見られた。

(固定遊具)

個々の目標に挑戦していた。のぼり棒をのぼりたいI男は「せんせいおいで、できないからおして、できない、できない。」と意欲がみられた。

(集団遊び)

かごめかごめ、だるまさんがころんだ、はないちもんめ等の遊びが見られた。教師が遊びから抜けるとしぜんに消滅してしまった。

(砂遊び)

ビーチパラソルを砂場に立てたので「パラシュートみたい」と言う子どもの声が聞かれた。いろいろな遊具を出したので多くの子が関わって集中して遊んでいた。

レストランごっこ……カレーライス、ふりかけご飯、アイスクリーム、ケーキ(花を摘んでかざっていた)ざるそばなどが作られていた。

工 事……………砂運び、砂堀、水運び等個々のイメージで楽しんでいた。

自分のこれまでの生活経験を、遊びの中で再現していた。友だちとのかかわりがある子とない子が見られたが、個々の中には自分なりのイメージで作ることを楽しんでいる。まだお互いに助け合って、知恵を出し合って遊ぶところまでは至らない。

(草花遊び)

シロツメクサで指輪や腕輪、ブローチ等、身につけて遊ぶものを作っていた。アメリカハマグルマで腕輪を作っていた子は、すぐ切れてしまうことに気づき、シロツメクサで作る姿も見られた。

(動植物の世話)

水やりは、ほとんどの子が頑張ってやっていた。ピーマンの成長やニガウリの花に気づき、歓声をあげていた。ピーマンを一個、二個、と数え「十個もできているよ。」「もっといっぱいかけよう。」と子どもたちの会話が聞かれた。じょうろの水がなくなると、また水をたらいから汲み入れて何度も水やりをして花や野菜へのやさしさがみえた。

うさぎを一人じめにして遊んでいる子に、一緒に仲間に入ってうさぎとかかわりたいが、なかなか「いいよ」という返事がもらえず、チャボとかかわることで満足気な表情をみせた子もいた。

草花遊び

アメリカハマグルマで小さな腕輪を作っている子がいる。

T「とても上手に結べたね。」

C子「先生に結び方を教えてあげるよ。」

C子は手先を器用に使い、作り方を一生懸命おしえてくれる。

C子「先生手を出して、飾ってあげる。」

T「わぁーすてきねえ、C子さんのお母さんは幸せねえ、こんなにすてきなものを作ってもらえるんだもの。」

C子「お母さんにもときどき作ってあげているよ。お母さん、とても喜ぶよ。」

話ながら手に飾ろうとした腕輪だが、小さいせいかなかなかうまく飾れない。そうしているうちにアメリカハマグルマの花が首から折れてしまった。すかさず

C子「先生、ちょっとまってね。」と念をおした。

向こうの方へかけて行きしばらくすると、手にしているのは、シロツメクサである。

T「どうしたの。」

C子「今度はシロツメクサで作るの、これで作ると切れないよ。」

T「まゝそうなの、出来上がるのが楽しみだなあ」

教師の期待がうれしかったのか、腕輪と指輪を作っていた。

C子「せんせい、できたよ、飾ってあげる。」

T「うれしいなあ、おねがいます。」

手に飾ってくれたあとお礼を言うと、今度は先ほど折れてしまったアメリカハナグルマを拾って花をさらに指輪にさして飾った。

C子「ほら…」

T「とてもすてきよ。」

笑顔で満足気である。身近な草花に触れて遊んでいると、自分のイメージをふくらませ、草花に対する気づきや、やさしい心情が育っていくのだろう。



うさぎ小屋に敷く枯草を、イモ畑近くから子ども達と取ってきた。枯草が硬いので子ども達は、じょうろで水を少しずつかけている。教師が硬さの具合を手でさわっていると、子ども達も手でさわって確かめた。

A子「やわらかくなってきたね、もうすこしお水をかける？」

T「そろそろいいんじゃないかな。」

B子「うさぎさんよろこぶね、先生じょうろの水、あまったよ。」

T「あまった水どうしようか。」

B子「じゃあおはなにお水をかけようね。」

T「それはとてもいい考えね。」

子どもの笑顔がこぼれる。

子ども達は、うさぎに、えさをやったり、うさぎ小屋の掃除をしたり、かかわって遊んだりしている。それらの活動を通して、うさぎの寝床に敷く枯草に関心を持ち、教師の言葉かけで、枯草のやわらかさを手で確かめた。そして「うさぎさんにとっていたくはないかな、やわらかさはいいだろうか。」というやさしい心づかいがみられる。

じょうろに残った水については子ども自身に考えさせて、どのようにしたらいいのか、生活行動が経験の中から自然な形でみられた。個を認め、誉めることにより考える力が育っていくのではないだろうか。

反省と考察

- ・ いろいろな遊ぶ場で友だちと楽しく遊ぶ姿がみられた。しかし友だちとうまくかかわって遊べない子や、遊びの中へ入りたくてもなかなか言葉かけができない子への適切な授助をもっと工夫したい。
- ・ 遊びの中でトラブルが起きると自分達で解決する姿がみられ、たたかれ、たたきかえす場面においては、幼児なりに手加減する姿がみられた。教師からみると喧嘩のように見えても子ども達にとっては、喧嘩ではなく、例えば物を取ったり、取られたり、追っかけたり、追っかけられたりと、一種のゲーム感覚で遊ぶということもあった。
- ・ 子ども一人一人の思いや行動を把握し、日々の活動を発展させる場と、環境づくりを心がけていきたい。
- ・ 子ども達が動植物の世話をする中で身近な環境にかかわり、変化や違いを発見したりする。その活動の中で、やさしさや思いやりを認めていきたい。
- ・ 教師の感性をみがくと共に、幼児の発達に必要な経験を積み重ねていける幼児期にふさわしい環境の中で子ども達を育てていきたい。

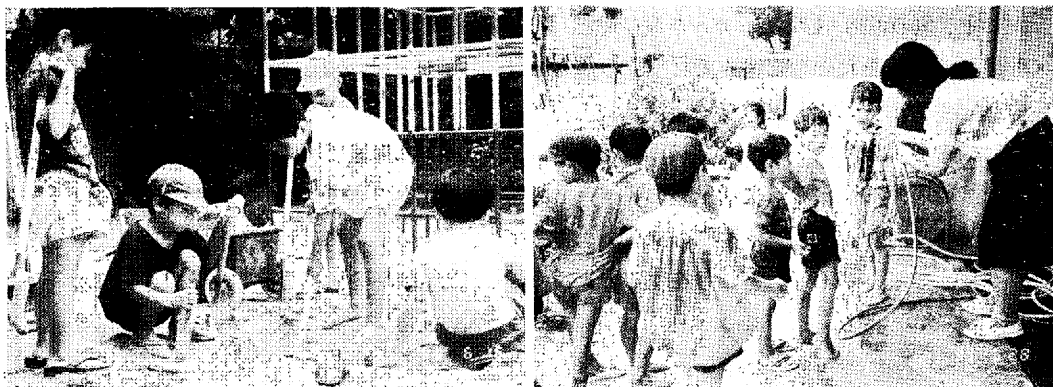
2 実践事例

他児とかかわろうとしなかったY男の変容

両親、姉（小二）、本人の四大家族である。共働きのため降園後はこれまでと同じ保育園（学童）へ帰る。家では常に母親に甘えているとのことである。

Y 男 の 様 子	教師の援助と思い *援助・思い
<p>(入園当初)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母親と一緒に登園するが、泣いて入室を嫌がる。教師にしばらく抱っこされると落ち着き、入室する。降園の時間になると笑顔が見られる。 ・一週間後、ぐずって登園する。カバンの中にビデオテープが入っており「お母さんと幼稚園から帰ったら見る約束をした。」とのこと、入口に10分程座り込んでから入ってきた。 ・泣きながら花束を持って登園する。しばらくすると粘土遊びや亀の水替えを毎日喜んで行き、男児2、3人と一緒に話しながらやるようになった。園庭では活発に遊ぶようになり、登り棒や雲梯を上手にこなす。 	<p>教師の援助と思い *援助・思い</p> <ul style="list-style-type: none"> *話かけスキンシップで安定をはかる ・園への不安が大きいだろうな、早く安心させたい。 *Y男の遊んでいる様子を見守る。 ・母親との約束の物を持って来ることで、心の寄りどころとなっているんだろうな。 *小動物の世話を通して興味をもたせ友だちとかかわるきっかけをつくる ・遊具で遊ぶ楽しさから自信を出させてあげたいな。
<p>(五月)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連休明け、激しく泣いて登園する日が続く。まわりの友だちは、なぜだろうと見守っている。 ・降園後、学童へ行かず母親の職場へ2時間程かけて行く。 ・他児とかかわりをもとうとせず、自分の興味をもったこと（亀の世話・砂遊び・ボール遊びなど）をする。 ・教師が手伝いをたのむと喜んで行う。うさぎ小屋の引越しや、草花の水かけ、苗植え、園長先生への伝言等である。 ・クラスのみんなが集まって活動する時は一緒に行うが、時々、ベランダや隣のクラスへ行ってブラブラすることがある。声かけをすると入室する。 	<ul style="list-style-type: none"> *母親と家や学童での様子、園での様子を話し合う。 *学童と連携をとり、Y男が学童に着いたら、園への連絡の方法として「着いたよ。」というTELEコールをしてもらう。 ・飼育動物とのかかわりで心の安定がはかれるといいな。 *職員室で副園長先生とのかかわり合いの中で、話したり、手伝いをさせることにより気分をほぐしていく。 *園長先生への手紙を届ける仕事から自信とふれあいの場を設ける。

Y 男 の 様 子	教師の援助と思い *援助・思い
<p>(六月)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラスの友だちが同じ学童へ行くようになり、降園の時は喜んでS男と学童へ帰るようになる。 降園時間になると「きょうは、S男と帰るよ!」と話し、S男や他児をリードして降園する姿がみられる。 ・「先生、きょうは泣かなかったよ。」と登園後、自満気に話すようになった。 ・砂遊びを始めたが、隣のグループの穴ほりに興味をもち自からかかわろうとするが、相手の同意を得ないまま行動してしまう。うさぎとも遊びたいがうまく言えずに、T男には「どろぼう。」と言われて追っかけられ、また、逆に追っかけたりの繰り返しが何度となくあり、楽しんでいるようでもある。 ・遊んだ後の片付けを声をかけると素直にやる。誉められるとますますがんばってやる。 ・友だちを求め、他児とかかわって遊ぶ楽しさが少しづつわかり、表情も生き生きとしてきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・S男が同じ学童に入ったきっかけから友だちになれるといいな。 *一緒に帰る友だちができたことを喜び、Y男の思いを受け止める。 *泣かずに登園できていることを誉め認める。 ・他の子の遊びに興味を示し、自分からかかわっていろいろな体験をしてほしいな。 *あせらずにY男の遊んでいるようすを見守り、協力しあっている時は認める。
<p>考察</p> <ul style="list-style-type: none"> ・泣きながらの登園や、母親と離れ難くしていたのも、Y男の自己表現として捉え自から他児とかかわっていくことを、あせらずに見守った。 ・自分本位だったY男が、トラブルを起こしながらも友だちとかかわりをもつなかでルールやきまりを少しづつ知るようになった。Y男の成長していく姿にY男に対する周りの子ども達のやさしさや思いやりが感じとれた。 	



3 実践事例

全園児とのかかわりの中から（おやつ場で）＝4月＝

（全園児89名）

1 この活動で育つもの

- おやつ時間は楽しいという期待をもつ。
- おやつ場をともにするというで、多くの友だちとかかわり、つながりを深める。
- 相手に対する温かい心情を育てる。
- 手洗い、あいさつ、歯みがき、片づけ、清掃等の基本的な生活習慣を育てる。

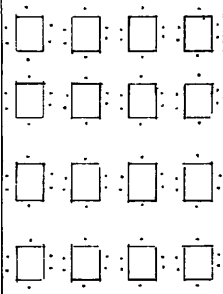
2 活動の背景

- 幼児は、初めての集団生活でおやつを経験する子、あるいは保育園生活でおやつや食事の経験をした子等いろいろいる。そこで全園児がおやつ場を同じくすることで友だちとのかかわりや楽しさを味わい、基本的な生活習慣を身につけさせる共通の目的から行うことにした。また、まわりの友だちや教師とのかかわりや援助により友だちとのかかわりやつながりも深まるのではないかと考える。

3 活動のねらい

場所 遊戯室 時期 4月27日

- クラスの枠をはずしてかかわる中で、友だちの輪を広げるきっかけをつくる。
- おやつを一緒にとることで、親しみをもち相手に対する温かい心情をそだてる。

時間	環境構成	予想される幼児の活動	教師の援助
10:00	おやつ場の机の配置	◦ 机を並べる。	◦ 「きょうは、どんなおやつかな」と声をかけ期待をもたせる。 ◦ 自分の席を決めかねている子には、子ども達に誘うように声かけをする。
	机拭き、おぜん皿、ミルクゼリー	◦ 好きな場所へ椅子を持ってくる。 ◦ 各グループ6人ずつ座る。	
10:30		◦ 当番をしたい子の活動 ◦ 机の上を拭く ◦ 各グループにミルクとゼリーを配る。	◦ 机の上をきれいに拭くことを気づかせ、清潔になった机の上におやつを並べるよう習慣づけていく。 ◦ グループのミルクやゼリーが人数分そろっているか気づかせる。 ◦ 楽しい雰囲気の中でおやつを食べることができるようにする。 ◦ 皆で協力して、片づけや清掃をするよう声かけをする。
		◦ 「いただきます」のあいさつをして食べ始める。 ◦ 全員そろって「ごちそうさま」のあいさつをして片づける。 ◦ 室内の清掃をする。	

<p>幼児の心情及び活動</p>	<p>教師の援助</p>
<p>みんなで机を並べ、おやつを準備を始める。 「〇〇〇一緒にやろう。」と声をかけている。</p> <p>机の準備ができると、椅子を自分の座りたいところへ持ってくる。 「〇〇〇どこに座るか」と聞きながら場所を決めている子もいる。</p> <p>当番になった子は、机を拭いたあとミルクやゼリーを配膳する。</p> <p>どこに座ったらいいのか迷っている子が、2～3人いる。 「座るところがない。」 「ここ空いているよ。」と子ども達の声。 「こっちに来て、こっち、こっち。」 6人そろっていないグループからの声かけがある。</p> <p>おやつを「1, 2, 3, …」と数え、確かめる。 みんなで「いただきます。」のあいさつをする。 ゼリーの種類が、ぶどう、りんご、みかん、レモンとあり、子ども同士好きなものを二個選んでいる。「一個はぶどうがほしい…」「私二個あるから一個交換する?」「うんありがとう。」と交替しながらたのしく食べている。 「ごちそうさま」全員そろってあいさつをする。</p>	<p>ゆっくりと時間をとり、ゆとりをもって準備ができるように手助けをする。</p> <p>「きょう、お手伝いをしたいお友だちはいませんか。」 「机拭きからお願いします。」 積極的に手伝う子ばかりでなく、やりたい気持ちはあってもなかなか言い出せない子への声かけをする。</p> <p>「〇〇さん困っています。」と子ども達に気づかせる。</p> <p>「みんなしんせつね、仲間に入れてくれて。」</p> <p>「〇〇さんやさしいね、交換してあげると偉いな。」 「やさしい子って、先生大好きよ。」 楽しい雰囲気の中でおやつを食べれるように配慮する。</p>
<p>反省・評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自由に席を選び、多くの友だちとのかかわりがもて、つながりができたように見受けられる。またみんな静かに話を聞くということが上手になってきた。 ・空いている席へ誘ったり、相手への気持ちを考えてあげたり、やさしさや思いやりがみられた。 	

おばあさんの来園

4 実践事例

四月、家庭へ園への協力をお願いする手紙を配布した。父母だけでなくおじいさんやおばあさんに、お話をしてもらったり、畑を耕してもらおう等、何か協力してもらえたらという内容である。

五月初旬、K男のおばあさんが、幼稚園にいらした。孫が園でどのように過ごしているかちょっと見たかったのでと話された。園の近くに住んでいらっしゃるが、初めての来園で、園のようすも知りたいということと、先日手紙を読んだので来ましたとのこと。さっそく保育室へ入っていただき、子ども達におばあさんが小さかった頃のお話をしていただいた。

T「どんな遊びをしていたんですか」と聞くと、O「石けりとか、ケンケンパーをして遊んだよ」子「ビー玉は？」O「ビー玉遊びもあったよ」子「学校は？」O「本部の山道通って、海の近くに学校があったから、2kmくらい歩いて通ったよ。」子「幼稚園は？」O「各字に一カ所あってね、子どもは10人から15人くらいで先生は1人だったよ。鉛筆はね、1年に1本、こんなに短くなるまで大事に使ったんだよ。だから物を大事にしてね。」子「はあーい」

T「お孫さんは何人いらっしゃるんですか」O「三人います幼稚園生はみんな自分の孫みたいだなあみんな神様にみえるよーニコニコしておりこうさんにしてよ。」子「先生の言うことちゃんと聞いてるよ。」いろいろなお話をしてもらいO「次はメモをしてお話をしに来ましようね。」子「きょうは、どうもありがとうございました。」とお話が終わった。みんな笑顔で「また来てねさようなら。」と見送った。

考察

- 突然であったが、15分程のおばあさんの話に熱心に耳を傾けていた。おばあさんが帰られた後、子ども達は「もっとお話が聞きたい 帰るの早い！」と残念そうにしていた。子ども達は「K男のおばあさんきょう来る？」と聞くことがある。なかなかおばあさんとの触れ合いが少ないだけに心に残ったのだろう。後日、K男の母の話によると「おばあさんは、きょうは、幼稚園の先生になったよと、大へん喜んでいました。」ということである。
- 去年は、三人のおじいさんに園の畑を耕していただいたり、お話をしていただいたりした。地域の老人会との交流をもつこともした。子ども達が地域のいろいろな人々とかかわって得た体験を日頃の保育に生かしていけたらと思う。



馬のステンキーと遊ぼう

5 実践事例

春の遠足の時、父母の御好意で子ども達が馬と触れ合ったり、馬車に乗せてもらったりすることになった。家で飼っている馬に幼稚園生が乗って楽しんでもらえたら……という気持ちからである。幸い遠足地の宮城公園は広場があり、この機会に身近に子ども達が馬と触れ合う体験ができる良い機会であった。子ども達は、馬との出会いと遠足の喜びが重なって、大へん期待した。当日は、天気に恵まれ、公園内を散歩して周りの自然を観察したり、遊具で遊んだりして馬（ポニー）の到着を待った。「ポニーはまだ来てないの。」と何度となく子ども達は聞く。しばらくするとポニーが到着した。みんなが集まりポニーや馬車への乗り方の話の中でポニーの名前を紹介した。「ポニーの名前はステンキーと言います。」ステキ等と思いながら、子ども達はステンキーとしっかり名前をおぼえた。早く馬車に乗りたい気持ちと、反面ポニーって恐くないかな？という不安をもつ子もいた。いよいよ順番に並び4人ずつ乗ることになった。ステンキーのからだに触ったり、たてがみを撫でたり、馬車に乗せてもらったりすると「ステンキー、あたたかい。」「まるい目がかわいい。」「鼻の穴が大きいよ。」「歯が大きいから怖い…」「ペロが長くて恐いなあ。」等と口々に言っている。「もっと乗りたいよ。」「おもしろかった。」「背中に乗ってみたい。」「小さいのに力持ちね。」と感じる子もいる。子ども達の中には、初めて馬を見たり、触れたりした子もあり、また馬車に乗った体験は感動したようだ。



翌日、子ども達はステンキーの話でもちきりだった。いろいろな話の中から「ステンキーの絵を描きたい。」ということになり、一人、二人と、描き始め十人程が描いていた。すると「手紙を送ろう。」「絵と手紙をステンキーにプレゼントしたらいいんじゃない。」ということになった。



後日、手紙は誰が書こうかということになった。「私、字が書けるから書く。」と女の子が言った。手紙の内容は、「すてんきーくんげんきですかえんそくのときにばしゃにのせてくれてありがとうございますすてんきーはおとうさんはいますかおおきくなったらこどもをうんでまたあそびにきてくださいね。」と書いてある。



絵と手紙をどのように送ろうかということになった。「郵便で送ろう。」ということもでたが、「はと組のH君に渡したらいいよ。」と決まり、さっそくはと組へ行ってプレゼントを託した。

考察

馬と触れ合い、馬車に乗った体験は、子ども達にとって感動し、絵を描いたり手紙を書いてプレゼントをしたいという気持ちにつながったようだ。馬への思いや、やさしさが手紙の中の「こどもをうんでまたあそぼうね。」という言葉になり、またH君の父母へ、協力への感謝の気持ちももてたようだ。

ステンキーへの手紙

ステンキーへ

ステンキーさん、ごめんなさい。お母さんが
おきくになったり、ごどもを
うんでまたおそひに
きてくださいね。



馬のステンキーに協力してもらったお母さんからのお便り

主人は大の馬好き

幼い頃、馬を飼ったことがあるということで、今でもその時飼っていた馬のことが忘れられず現在も馬を2頭飼っています。そんな主人の夢は多くの人に馬の良さ、おもしろさを知ってもらい、馬の好きな仲間をたくさん作り、馬と触れ合って遊ぶことです。

今は家族で、晴れた休みの日等は海に馬を運んで楽しんでます。

今回、幼稚園の遠足に参加させてもらったのは、子供達に馬と触れ合って楽しんでもらいたい気持ちからでした。私達が思った以上に子供達に喜んでもらいまたたくさんの子供達の笑顔を見ることができとても楽しい日でした。

泣く子もなく「もっと乗りたい。」と言う子供達、「これで馬の好きな子がたくさん出来るといいな。」と主人は話していました。

H・Sのお母さんより

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 幼児の生活の実態把握と園に望む事柄を捉えることができ、幼児にふさわしい生活を考え、保育の場と環境を工夫し、さらに援助の仕方に生かすことができた。
- (2) 「思いやり」は日々の園生活の中で友達や教師、まわりの環境と関わって育つところが大きいと感じた。言葉や態度、教師のモデリングによって、見たり聞いたり体験したりすることにより育てられていくものではないかと思う。
- (3) 家庭や地域との結びつきで園生活にうるおいがでて幼児が人とかかわる場、園外保育や園の周りの接点で思いやる心の芽がでてきた。

2 今後の課題

- (1) 小動物の飼育や園庭の飼育小屋の設置の工夫、色々な草花の栽培等を通して子供をとりまく環境を、もっと豊かなものにしていきたい。
- (2) 一人一人の幼児の内面を捉え理解をし、育ちに合った適切な援助ができるように実践していきたい。

おわりに

短く感じた四カ月、私なりの研修ができました。ご指導下さいました宮城久子指導主事はじめ各指導主事の先生方、教育に熱意あふれる前田貢所長、諸見里稔係長、事務の皆様、研究員の仲間に関心より感謝申し上げます。保育実践においては共に研究を進めて協力頂きました仲西幼稚園の先生方に深く感謝申し上げます。

<引用・参考文献>

『幼稚園教育指導書』	文部省	フレーベル館
『幼稚園教育課程編成要領』	沖縄県教育委員会	
『幼稚園教育指導資料第2集』	文部省	チャイルド
『幼稚園教育指導資料第3集』	文部省	チャイルド
『保育実践用語辞典』	西久保礼造 著	ぎょうせい
『人間関係』	大場牧夫 編著	ひかりのくに
『保育のなかのかかわり』	森上史朗 編著	フレーベル館
『幼稚園じほうV O18 No.3, No.8』	全国国公立幼稚園長会編	
『研究報告書(紀要201号)』	那覇市立教育研究所	
『教育報告書(第6号)(第7号)』	浦添市立教育研究所	
『研究紀要「心の教育」部門編』	熊本市教育センター	
『研究報告集第98号』	桐生市教育研究所	